

## 第十五編 風流

### 第一章 書道

#### 第一節 書家の略傳

佐賀は儒学の旺んな地だけに多くの鴻儒碩学を出し、此等の人々はまた詩文にも巧にして、書道をも研鑽し其の蘊奥を極めた人も尠なくなかつた、就中副島種臣は他の追隨し能はざる出色の書体を現はし、小城の中林梧竹は明治の書道家中、本邦第一流の能書家として其名を海内に知られていたのである、以下佐賀書道家の名ある人々に就て記して見よう。

**僧是琢** 佐賀泰長院の僧、明淋と号した、豊臣秀吉の朝鮮の役に佐賀藩祖鍋島直茂に従ひ、軍中に在りて文書の事を掌る、文祿頃の人

**洪浩然** 姓を洪と云ふ、豊臣秀吉征韓の際、鍋島直茂に従つて来り歸化して藩士に列せられ雲海と号し書を能くす、其の書風節立つて瘡かさの如くなるを以て世に「瘡浩然」と称せらる。明暦三年第一代の藩主鍋島騷茂に殉死した。

**武富藤齋** 武富咸亮の事にして、字は伯通、通称は一郎右衛門、琴翁また竹堂と号した、元祿中、佐賀大財おうたからに聖堂を建つ、性至孝にして琴曲に精通せるが、享保三年歿した、年八十三、其の書は明治四十四年久

留米行在所於て天覧を賜つた。

**鍋島治茂**

佐賀藩第八代の藩主、字は君績、詩文を好み又書を善くし時に画を作る、文化二年薨す、其書は明治四十四年久苗米行在所に於て天覧賜ふ。

**古賀精里**

古賀撰、字は淳風、通称弥助、訥齋と号す、徳川幕府に召されて儒官となる、柴野栗山、尾藤二洲等と共に寛政三博士の一人である、文化十八年歿した六十八歳、其書は明治四十四年久苗米行在所に於て天覧を賜ひ、大正四年即位大礼の際、従四位を贈らる。

**高柳浦里**

高柳棗、字は子勉、通称は忠助、松水と号す、自ら「高柳」を「高楊」と書く依て「高楊先生」と称せられた、松原神社の石華表は其の三十二歳の時の作だといふ、文政三年死す。年五十五

**古賀朝陽**

古賀能遷、字は仲健、通称は安道、三養基郡轟木の人、儒医を以て佐賀に召さる詩文を能くしていた天保八年死す六十五歳

**枝吉神陽**

枝吉経種、字は世徳、通称奎之助、南濠の子である、昌平齋に入り舎長となり歸て教授となる、和漢の学殖深く又詩文に長し書を善くす、佐賀の維新志士は、多く神陽の薫陶を受けた者である、文久二年歿した年四十一、明治四十四年久苗米行在所に於て其の書は天覧を賜ふ且つ従四位を贈らる。

**鍋島閑叟**

佐賀藩第十代の藩主、贈従一位鍋島直正、明治維新の際に於ける明君である、幼名は貞丸、將軍家より「齊」の一字を授けられ一時齊正と称へたが、後ち「直正」に復し致仕して閑叟と号した、詩書を善くし膝世菴、茶雨亭、昆谷、紫水、拳堂、漣齋、愷庵等の別号あり、作品多き中にも「鍋島閑叟、字閑叟、号閑

叟」の雅印あるを「三閑叟」と称して最も尊重するといふ、明治四年薨去した年五十八歳

### 千住西亭

字は士行、名は健任、通称は大之助、佐賀の詩書家にして西翁の別号あり、明治十一年死歿す。

### 古賀竹堂

名は千斯、字は鶴年、通称を精蔵といふ、虎苑、独虎の別号あり、書家にして又竹、菊の墨画を作る、明治二十一年死す。

### 迎 迂齋

遠長と云ふ、通称は文橋、佐賀の書家であつたが明治二十一年の頃死す。

### 大木喬任

正二位伯爵、其次齋と号す、数次内閣に入りて大臣となる、就中司法大臣として其名高し、書を善くしていたが、明治三十三年薨去す年六十九

### 相良勵齋

名は頼善、通称は平作、書を能くせるが明治三十七年死す。

### 副島種臣

蒼海、一々学人の号あり、正二位伯爵、佐賀の儒者枝吉南濠の次子、神陽の弟である、副島氏の養子となりて氏を襲ぐ、維新の際王事に奔走し大臣たること数回、就中外交問題に盡力す、詩文に長し又書を善くした、明治三十八年薨去す七十八歳

### 武富時敏

字は孟修、蜃堂、圮北、蜃翁等の号があつた入閣して通信大臣、大蔵大臣等となる、清廉なる政治家として世に知らる、詩書を善くす、昭和十三年十二月薨す、年八十四歳、彼の武富廉齋の後裔である。

以上の外、尚ほ多くの書家があるであろうが、此等は後日の調査に待つこととする。

## 第二章 繪 畫

## 第一節 佐賀と繪畫

繪画にも種々の流派が伝へられ、或は土佐派、或は狩野派、又は田山派、四条派、浮世絵などあるが今は此等の流派を論ずることを措て、佐賀と繪画について少しく記して見よう。

雪舟と甫雪、等顔

佐賀の繪画は文明の頃、画聖(?)雪舟に教を受けた甫雪に始まると伝へらる、甫雪とは松浦郡の僧、等禪の画号にして又松浦とも号していたとか、宋、元の画風を慕ひ学び、文明中、雪舟が明国みんごくより帰朝するや之に師事してその妙旨を得たと伝へらる、その後天正年中、同じ松浦郡の人で等顔といふがあつた、通称は原田治兵衛といふ、初め狩野松榮及び同永徳に学んだが後、雪舟に私淑し其画風を得て氣韻高く有名と為つた、後年其の居を雪舟が住んだ周防の雲谷庵に移し、雪舟第三世を標榜したので、世に等顔を雲谷派の祖となしてゐる、其の子、等屋、等益、孫等與など相継いだか漸次振はなくなつたといふ、雪舟は本邦漢画の大家で、甫雪、等顔等が其の画風を伝へたとすれば、我郷土には先づ漢画の流れを汲む、繪画が伝はつたものと思はる。

藤原時代の末期に起つた土佐基光を祖とする土佐派の画は、時代も頗ぶる古いが、我が郷土から高取稚成などいふ同派の畫家を出して居るといふ。

浮世絵

浮世絵は寛永の頃、其の始祖岩佐又兵衛(浮世又兵衛ともいふ)、當時の町人階級または遊里の婦人などを画材として描きたる繪画にして、我が郷土にも此流の画家に、榮錦、藤堂などを出してはいるが、その時代、伝記等を詳かにせず。

また南画と同義に解せらるる文人画がある、之は書、画を能くし、詩文に通した一派の画を云ひ、我が郷土の如き文教の盛んなりし土地に、詩文に長じた人も多く従て文人画も流行し且つ享保の頃、支那の伊孚九、または沈南蘋が長崎渡来に依て刺戟さるる所も多く、爾後名ある画手を出している。

更に徳川氏の末期に至り、南宗の画風を学び諸家を折衷して一家を開いた岸駒の流れを汲む、岸派の絵畫を描くものに岸天岳がある、天岳は天保年中、岸駒に師事して、蜚雪の功を積み遂に岸姓を許された程の優れたる佐賀の画家にして、門人も相当にあつたと云ふ。

其後海外諸国との交通頻繁となるに連れ、絵画も亦西洋画（油絵）なるものを輸入、学校を設けて盛んに之を伝授しつゝあるが、我が郷土の人には、明治四年旧藩主鍋島直大侯の渡英に随ひ、彼の地に赴き後ち伊太利公使館書記官として赴任し、傍ら洋画を研究したる日本初期の洋画家百武兼行や、明治七年英国に留學して洋画を學んだ、日本鬮秀画家の先駆者鍋島胤子があり、現代では久米桂一郎、岡田三郎助などの洋画の大家がある。

## 第二節 畫家の略傳

前節佐賀に於ける絵画の概要を記したが、更に其の画家略伝を掲げ、此等の画家が如何なる絵画に親しんでゐたかを窺つて見やう、但し佐賀の画家と云ふに範圍を止めたので、蓮池、小城、鹿島、その他の地方有名な画家を記せず、又佐賀關係の画家をも或は脱せるもあらうが、此等は識者の教へを俟つこととする。

**文周** 狩野元頼、其先は京師の勅修寺氏、故あつて筑後に居る時、龍造寺氏の臣となり、元頼に至り主命を以て京都の狩野家の画を学び、再来其姓を狩野と改む、文祿年中の人である。

**雪山** 通称を広渡彌左衛門と云ふ、元筑前の後藤寺氏、狩野派の画を善くし鍋島直茂の征韓役に徒つて絵画方となる延宝二年歿した、其画は明治四十四年久留米行在所に於て、明治天皇の天覧を賜ふ。

**宗俊** 狩野派の画家、本姓は甲斐氏、京都に上り狩野家に学びて名あり、狩野宗俊、又は友巴、友坡とも号してゐた、鍋島直茂に従ひ征韓役に従事す承応三年に歿す。

**友閑齋** 小原有信、狩野派の画を能くし明暦二年、画を以て佐賀藩に召されたが子孫罪を犯して其跡目を絶つた。

**明政** 通称大園七兵衛、佐賀の人、狩野友巴(宗俊)の弟子である、藩主鍋島勝茂の侍臣にして勝茂、逝去するに及び明暦三年之に追腹した。

**尚長** 通称を田中藤兵衛といふ、寛文頃の佐賀の畫家である。

**英鐵** 大木惣右衛門といふ、書畫を善くし、壇ノ浦某寺に納むる「壇ノ浦戦争」の畫は其の靈夢に感じて作る所として甚だ有名である、また佐賀の楠公社の神扉の畫も、其の拙くところだと云ふ、寛文八年歿した。

**高雲** 元祿中の人である、佐賀藩主鍋島綱茂に医を以て召さる、狩野派を書き特に達磨の図を作るに得意であつたと。

**峰雪** 成富氏、元祿頃の佐賀の畫家である。

**永信**

林氏、法眼狩野宗信の二男、之信の長男にして貞享三年藩主勝茂に召された畫家である。

**乘信**

林氏、次郎左衛門と称した、前記永信の子、藩公の有馬陣に従つた畫家である、正徳四年歿した。

**梁山**

水ヶ江の慶雲院、または市外嘉瀬村の富泉院等に住す、宗秀、桜花軒などと号す、詩歌及び畫を業しむ、享保頃の人にして山本常朝と交遊してゐたと云ふ。

**獨幽**

成富茂陸、通称十右衛門、諫早の豊前茂敬の子にして佐賀の成富氏の養子となる、畫を善くす寛永六年歿した、其画は明治四十四年久留米行信在所に於て天覽を賜ふ。

**潮湖**

龍造寺豊後守信親の二男である、姓を葉山と改め葉山潮湖と云ふ、名は家氏、通称は二介、藩公の命に依り江戸に赴き狩野派の畫を學ぶ、寛永十四年頃藩に對して穩かならざる企てありて捕へられ切腹を命ぜらる、潮湖は好んで畫題を「蒙求」の故事に採り、畫の上には必ず「蒙求」の語を題してゐたと、また加藤清正の需めにより、熊本城の屏壁に畫いてゐると。

**綱茂**

玄梁公と云ふ、佐賀藩第五代の藩主鍋島信濃守である、致徳斎と号す、篤學者にして狩野派の畫を善くしてゐた、宝永三年卒す五十五才、其の畫は明治四十四年久留米行在所に於て明治天皇の天覽を賜ふ。

**秀精**

永松源左衛門といふ、元鍋島彌平左衛門(今長崎縣神代)の家臣であつ、たが、寛保二年畫を以て佐賀の本藩に召さる特に鯉の絵に巧みであつたと、八十余才にして死す。

**子璠**

三浦英興、通称は淵蔵、狩野派の画を描く、佐賀城内の障壁にも画くところありと、寛政六年歿す。

**匡信**

その出所審かならざるも、狩野派の画家にして佐賀の徳善院に寄食してゐた、非常の酒豪家で朝から飲む、画を頼めば之を諾すれど、其の氣の向かざる時は決して筆を採らず性狷介にして權門に諛はず、貧

乏ではあつたが其画は名人の域に達してゐたと、諸国流浪の末、佐賀城下に來たそうである、徳喜院を去りて後、人の恵みを受けず、城東の高尾巖に於て餓死したと云ふ、書画人名辭書に「狩野匡信は中信柳雪の子、寛政頃の人」とあるは多分此人の事であらうと、人呼んで「破れ箱の匡信」と云つてゐた由、蓋し本人が貧乏であつたのと其名の匡の字が、やぶれせ□の中に王の字で、狩野正信などと間違へぬ称呼であらう、天保の頃俊信とて匡信の子といふ画家があつたと称せらる。

**治茂** 佐賀藩第八代の藩主、左近衛少將鍋島肥前守、名は公懋、字は君積、書画には多く勝懋とありと、詩文を好み書を能くし又画を善くす文化二年薨した、年六十一、泰国公と諡してある。

**宗閑** 増田氏、文化中、藩命に蒙り四年間江戸に於て画及び茶道を學ぶ、現に鍋島侯爵家に存する歴代肖像中の泰国、円諦、香臺、巍松、淨諦各院殿の眞影は宗閑の筆であると。

**藍阜** 牛島璋、通称和三郎、越山道人とも号す、伊万里の人、後ち佐賀白山町に住居す沈南蘋、費漢源、皓山人等を師とし、優れたる南宋画を描く、時の儒者穀堂、朝陽などと交る、武富圀南幼にして初めて藍阜に學ぶと云ふ、文政中の人である。

**洞谷** 香月義貫、通称又六、安政頃の画家にして彼の明治七年の役に名ある、香月経五郎の父であると。

**佩川** 草場韓、字は棟芳、通称は暁助、多久の人、儒を以て佐賀本藩に召さる、六十九才の時に幕府の召聘ありしも応ぜず、佩川は佐賀藩校の學風を定むる事に努めた、画は越繡浦に學び詩文書画善せざるなし、障子に映る竹影に依りて作つた、独自の墨竹が最も著はるゝ所である、佩川は初め玉偏の「珮川」と書てゐたので、世人は其の当時の書画を「玉佩川」と呼んでゐる、慶応三年八十二才を以て歿した、其画は明治四十四年

久留米行在所かみざしよに於て天覧を賜ふ、大正十一年陸軍特別大演習の際、従四位を賜はつた。

**天岳** 岸讓、通称英作、又俊平とも云ふ、取長堂、吟龍軒、梅坪、漁耕、無声書屋等の号あり、小城の人に於て佐賀の小林家に養はる、初め巨勢家の門に入り後、岸駒の弟子となり岸姓を許さる、俗曲其他の諸技に通ず、明治十年歿す年六十四、其の画は明治四十四年久留米行在所に於て天覧を賜ふ。

**松根** 古川氏、字德基、通称与一、檜園、霞菴、寧園等の号あり、諸事通せざるなく、就中故典に通曉し又和歌、絵画に長じてゐた、画は柴田是真に学んでゐたと、其邸内に歌聖祠あり、郷土の久米邦武博士碑文を撰す、明治四年閑叟公の薨去に追腹した年五十九才、その画は明治四十四年久留米行在所に於て天覧を賜ふ。

**圯南** 武富定保、字は元謨、通称は文之助といふ、密菴、碧梧楼、款段子、款翁、天燭舎等の号あり、詩文書画とも巧みである、画は牛島藍卓に學ぶと云ふ、明治八年歿す六十八才、其画は明治四十四年久留米行在所で天覧を賜はつた。

**疎影** 石丸静、佐賀の画家にして岸天岳に學ぶ、彫刻家であるが画の弟子多く孰れも師の号に因みて「梅」字を冠する号を用ゆ、明治三十八年歿す。

**快堂** 高柳高敬、通称文次郎、南宗派の画を中林竹洞に學ぶ、明治四十二年歿す八十六才、其画は明治四十四年久留米行在所で天覧を賜ふ。

**介堂** 小城の人、柴田花守の次子、佐賀の納富家に養はる、逸雲、鐵翁の門下、大正七年卒す、年七十五才。  
**雅成** 高取氏、熊夫、山名貫義に師事す、文展で数回入賞、現に日本美術院会員で土佐派の画家として重

きを為してゐる、近年は殆ど宮中の御用のみを画いてゐると、佐賀の人にして東京に住居してゐる。

**胤子** 慶応三年藩主鍋島直大に嫁し、明治七年共に英国に留學して洋画を学ぶ、實に日本閩洋画界の先駆者である、明治十三年卒す、叢中の卵の画、鍋島家に尙ほ存すと。

**兼行** 百武氏、安太郎と云ふ初め古川松根に師事して和漢の學と共に書畫を学ぶ、明治四年鍋島直大に従て英国に渡り、同十三年伊太利公使館書記官として赴任、劇務の傍ら洋画を研究し日本初期の洋画家として知らる、明治十七年卒す四十二才。

**桂一郎** 久米氏、西洋画家、慶応二年佐賀に生れ、明治十九年渡仏、ラファエル、コランに師事す、同二十六年帰朝、東京美術学校に入る、文展審査員に挙げらるゝこと數回、日本洋畫界の元老にして明治美術界の功勞者である。

**三郎助** 岡田氏、西洋画家、明治二年佐賀に生る、黒田清輝、久米桂一等等に学び同三十年渡仏、ラファエル、コランに師事、帰て東京美術学校教授となる、文展、帝展の審査員で帝國美術院会員である、東京に住す。(以上西遺芳、佐賀縣大觀等に依る)

## 第三章 詩歌

### 第一節 詩文

詩文を見れば儒者を思ひ、儒者と聞けば詩文を思ふ、風流韻事は儒者の弄するところで、強ち詩文に巧みなるのみならず、詩文、書画兼ね備へた技能を有する人もあり、其の一技能を論撰するにあらず、されば左の人々も詩文のみに長じてゐたと云ふにあらず。

**僧 梁山** 水ヶ江の慶雲院、佐賀郡荻野の富泉院の住僧にして宗秀、櫻花軒と号してゐた詩歌に巧であつた、山本常朝等と交遊す、享保中の人。

**武富壽山** 英亮と云ふ、字は柏淳、通称は治平、廉斎の子にして詩文を善くし、又彫刻の餘技もあつた、享保中の人である。

**僧 大潮** 佐賀郡巨勢村龍津寺の化霖の弟子(伊万里の紺屋の子と傳ゆ)諸國を遊歴して名声を轟かす、詩文の作多し元皓、月枝、魯寮、魯崇、泉石陳人、西溟等の別号あり、後ち甘露寺に隱退し、明和六年九十六才を以て寂した。

**牟田口筠齋** 名は通清、字は天錫、通称は藤右衛門、別に禹圭、または士禹と号してゐた、佐賀の人で詩を好む、安政二年死す。

**江藤新平** 名は胤雄、南白、白南とも号してゐた、詩歌を能くしてゐた、明治七年四月国事犯を以て刑死したが、後刑名を除き大正五年特に正四位を贈らる。

**島 義勇** 通称國右衛門、樂齋、國華と号し詩歌を能くす、明治七年、江藤新平と共に刑死す後、刑名を除かれ大正五年四月、特に従四位を贈らる。

**佐々木丹陽** 定欽、通称は守右衛門、古賀朝陽の子、佐賀藩士佐々木氏の養子となる、詩文を能くしてゐ

たが明治の初めに死す。

**福田桃里** 通称は又蔵、或は復蔵と云ふ、初め東里と号してゐた、佐賀の人、詩を好む明治三十一年死す、年七十一。

**深川恒瑞** 通称は亮蔵、維新志士の一人、後ち鍋島侯爵家に入り、同家の為に盡して功あり詩を好む、明治三十五年死す、年七十二。

## 第二節 和歌

漢詩を「からうた」、和歌を「やまとうた」と称へ、漢詩に絶句、律、俳律、古詩ある如く、和歌にも長歌、短歌、旋頭歌などがある、平安朝時代から短歌のみ盛んとなり、徳川時代に加茂眞淵や戸田茂睡など出て、復古説を立て復た長歌が起つたと云ふ、佐賀に於ては正徳の頃より歌詠む人が漸く多くなつて来たが、明治の中葉に至りては歌風も漸く革まり、所謂新旧兩派を為すに至つた觀がある。

**富本梅坡** 富本竹徳とて佐賀の歌人であるが、正徳二年死亡す。

**山本常朝** 神右衛門と云ふ、古丸と号した、藩主鍋島光茂の薨するや哀慕自ら禁せず、髪を薙して北山に世を避け、復た俗事に拘らず、歌を西三条大納言実教に学び、古今和歌集秘談の伝授を受け、歌人としての誉れ高し、享保四年六十一才を以て歿した。

**永淵有竹** 武兵衛と通称す、佐賀の歌人にして、天明四年死す、年七十才。

**堤 範房**

主礼と云ふ、佐賀の歌人、文政三年死去す。

**山領利昌**

字は師言、通称は主馬、梅山と号した、和歌を善くし又武術、礼法に通ず、藩命に依りて多く長崎に勤む、同地に於て司馬江漢など交友が多かつたと、文政六年死去す、六十八。

**重松道雄**

通称は卯太夫、佐賀の歌人である、文政八年死去す、年四十九才。

**今泉千春**

名は益興、通称六太夫、琴仙または盤谷と号してゐた、佐賀の歌人にして天保頃の人である。

**羽室貞風**

長高と云ふ、佐賀の歌人、弘化三年歿す。

**岡本髓巖**

名は貞永、通称は源右衛門、維鳩と号した、元京都の医、父の代より本藩に召さる、維鳩は和歌を善くしまた武術家にして礼法に精はしかつた、後ち薙髮して髓巖と号してゐたが嘉永四年死亡した、七十六才。

**南里有隣**

南里居居、佐賀の歌人である、文久四年死去す。

**古川松根**

通称与一、檜園、寧楽園、霞菴などの号がある、和歌は最も其長する所にして邸内に歌聖の祠字をさへ建てゝゐた、明治四年鍋島閑叟に追腹殉死した。

**今泉千秋**

今泉千春の子である、歌人にして明治三十三年死亡した。

**佐野常民**

従二位伯爵である、雪津と号す、医家より出て文勲を累ね、華族に列し、数次大臣に任す、日本赤十字社の創立者で又其社長であつた、詩歌を好む明治三十五年薨す八十一。

此外江藤新平、島義勇等も好で和歌を詠した、最近には前佐賀図書館長であつた大木俊九郎等も歌人として知られてゐる。

## 第四章 俳句

## 第一節 連歌

長連歌

連歌は又「つくばのみち」とも呼ばれてゐる由、一首の歌を問答的に二人で作るのであるが、後には二人以上の作者が寄て、初めの一人が十七文字の長句を詠めば、次ぎの人が十四文字の短句を付け、それのの意味を持た長句と短句を、順繰りに並べ其句と句とが互に意味を適合ひ、長い歌の形を為す、之を「長連歌」といふ。

狂連歌

普通「連歌」といへば長連歌のこととて、百句つづ付けるものを百韻、五十句つづ付けるを五十韻、三十六句づづ付けるを歌仙と云ふとか、此の連歌は鎌倉時代に非常に盛にして宮中でも御催しあり、また公卿、武家にも之を嗜む人があたと云ふ、従て宗祇そうぎ、宗長そうちようその他有名な連歌師も出てゐるが、其規則が面倒なのと詞が六ヶし過ぎるなどで、一方に「狂連歌」とてモットやさしく、ソシテ可笑味ある連歌を作る事も流行したと。

俳諧

斯うした可笑味ある連歌を「俳諧體の連歌」ともいふ、蓋し「滑稽は俳諧の如し」と云はれた通り、滑稽といふ意であるから、其の俳諧體の連歌が略せられて後には単に「俳諧」と呼ぶやうになり、又分りよく連句とも云ひ、連句の最初の句を「発句」といふ、近世に至つては、「俳諧の連句である」のを単に「発句」のみを詠むやうになり、今は発句も名を改めて「俳句」となつたのである、詰り俳諧とは発句と連句とを、引つくるめ

所謂「田舎、蕉門」

た名で昔は俳句と云はず発句と呼んだものである。

而して俳聖松尾芭蕉(天和、元祿頃の人)出て、当時の俳句の頗ぶる輕浮なるを悲み、「蕉風」なる俳道を伝播せんと欲して諸国を巡歴し、遂に大成して門人数千、其角、嵐雪、杉風、支考、其の他有名の門人が多かつたが、芭蕉の歿後、此等門人の内には、自家の流派を立て、遂には力弱き句となつた、其後蕪村(安永、天明頃の人)等の如きは之を慨し、俳道をモ一度芭蕉の精神に返さうとしてゐた、此等の人達が美濃派や、伊勢派などを「田舎蕉門」と下卑する様になつたと云ふ

## 第二節 佐賀と俳句

葉隠れの俳句

「葉隠」の筆者田代陳基が、宝永七年三月佐賀城北の北山に、初めて山本常朝の草庵を訪れし時、兩人の間に

憂世から何里あらうか山桜 古丸(山本常朝)

白雲や只今花にたづねあい 期醉(田代陳基)

の句を残して居るを見れば、此の人々に亦俳句をも能くしてゐた事が窺はれる(葉隠より)

安永の頃(紀元二四三二年頃)佐賀に迅鷹といふ俳人ありて、斯道を研究し多くの門人も取立てゐたが、惜いかな其伝記など委しく傳はらず。

其の後、天明、寛政の頃に無漏庵菊亮と云ふ俳人があつた、本名は副島作次右衛門と称し、此人は蕉門に修行すること五十年に及び、全国に渡りて名を響かし、佐賀俳道の中興と謂はれた人であつたが寛政十年死歿

## 芭蕉の句碑

した、其の嫡孫に菊主とて之亦俳啄ありて、門人も多かつたと云ふ。  
無漏庵菊亮在世の時、寛政五年三月彼の芭蕉の百回忌に際して之を記念し、且つ之が追福を祈らんとて、佐賀枳馬場の長徳寺に其の句碑を建てた、其碑は今尙ほ存してゐるが。

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり

## 十方庵

と芭蕉が小夜さよの中山なかみやま（静岡縣金谷驛の北の一名所で東海道の一難所）で詠んだ句の眞筆を埋め、其上に碑を建てた、当時肥前の俳人悉く参集して盛大なる供養を営んだと云ふ、蓋し当時佐賀にも、俳道の盛んなりしことが思はれる。  
降て文化の頃、佐賀高木町觀照院の僧に十方庵と云ふ有名な俳人があつた、当時の人。

一（市）は高橋、 二（荷）は牛津、 三（産）は泰順、 四（詩）は安道、 五（碁）は但馬、

六（祿）は諫早、 七（質）は成富、 八（鉢）は皿山、 九（句）は十方庵

と云つた位で、その十方庵は俳号を雲在坊と称して、美濃派の俳人であつたと云ふ、天保十年歿した。

## 長谷川里溪

長谷川里溪と云ふも亦俳人で、水町氏の出であるが、後ち長谷川氏を嗣ぎ「御掛硯方」となり会計その当を得て手明鎗となつた、清廉恪勤五十年恰も一日の如く、眞に得難き循吏であつたと云ふ、俳句を能くしその江戸、大阪に往来するの間、門人を得る数百人に及んだと、弘化二年、年七十八才で歿した

## 俳道の革成

## 佐賀の俳壇

其の後明治の中葉頃より碧梧桐、青木月斗、正岡子規などの新派俳人出て、頻に俳道の革成を唱へ出し、在来の俳句を目して旧派の俳句、月並句だと称してゐる、就中碧梧桐等の句作は五七五の俳句調を懸け放れた、一大新味（？）が見へて、之れでも俳句かと思はしめる程である、俳句は矢張り俳句調があつて欲しいと思はる、現今佐賀では青木月斗の「同人社」の俳句が流行し、佐賀俳人の多くは其門下らしく、吉田南鷗などが、佐

賀の同人社俳壇の牛耳を取つてゐるやうである。

## 第五章 茶道と花道

### 第一節 茶 道

茶道にも種々の流儀ありて、昔から佐賀に行はれてゐたものに裏千家、宗偏、有楽、などがあつたと云ふ、佐賀の茶道家として古く聞へたるは龍造寺六郎次郎であらう、茶道系全集に此の人を千利休と同時代(千利休は大永天正)の人と云つてあると、此の六郎次郎とは、龍造寺周家の事で、剛忠の孫、隆信の父に当る人である、天文十四年馬場頼周等に謀られ、兄弟叔姪何れも敵の伏兵の爲め、川上、祇園原などで死んだのである。

鍋島氏の時代、茶道を以て佐賀藩に召された人に藪内了智がある、父は京師の茶道藪内流の三世劍翁紹智で、了智は其の次男であつたが、一度佐賀に来住せるも天明の頃尙ほ斯道練磨の爲め、再び上京して六世紹智に就て業を積み佐賀に歸つた其師六世竹陰紹智が了智に授けた免状は、現に市内の藪内家(八幡小路)に保存してある由、了智は佐賀藩に召されて茶道司家藪内(八幡小路)の祖となつた人である、了智の子に宗也といふあり、その子また宗也として茶道にいそしむと茶家醉古集にも見ゆといふ

その外藩政の頃有名な茶道の宗匠には、千々岩友古、増田宗閑、伊東春洋等があつた、千々岩は明和、寛政頃の人で画を能くし、増田は文化中、藩命を被り江戸に於て、画及び茶道を学び、伊東は之も茶道の外、画を学び鍋島家には、その筆に成る閑叟公の肖像が保存せられてあると、又伊東孤雲といふも宗偏流の宗匠にし

て、中野致明に之を伝へ、今泉千秋も宗偏流の宗匠であつたと、馬責馬場の東詰めにゐる川瀬孫之允、中ノ橋小路の晴氣作一、元町称念寺の住職蜂須賀学純等は何れも裏千家の茶道を教授してゐる人で、明治の頃までは此等の人々尙ほ在世して盛んに門人を取立てゝゐたと。

金崎守孝といふ小城の宗匠も亦、明治二十三、四年の頃までは、市内西魚町に仮寓して門人を取立てゝゐたが此人は有楽流で、良家の婦女子が其門に通ふ者も多かつたといふ、その頃は官吏にも亦斯道の研究を為す者ありて県庁、裁判所の人々にも此の趣味が流行し、裁判所判事の松井通昭などは、頗ぶる熱心家であつたと謂はれてゐた。

現今市内の各高等女学校などでも、課外教授として授けてゐるらしいが、教師に依りてその流儀を異にし、例へば裏千家、或は有楽流といふ風に、佐賀全体の学校を取纏めた教授ではあるまいと思ふ。

## 第二節 花道

佐賀の花道は大体「池ノ坊」と見てよからう、池ノ坊は立華りつくりのの宗家そうけ小野妹子おののいもこ（紀元一二五三年頃）後に入道して専務と称し、京都六角堂頂法寺の池の傍に坊を結びて之に住み、朝夕花を本尊及び聖徳太子の靈前に供へ、又華法を衆人に授けてゐたが、爾来子孫相續して家法を伝へ、第二十七世の孫専鎮の時、足利將軍より「華道家元」の称を授けられたといふ、池ノ坊は眞、行、草三體の華法を定め之を伝へてゐる。

佐賀では遠き昔は知らざれど、明治時代に於ては呉服町の古賀長太夫、同野口恵助、柳町の森永作平、寺町の城雲院住職清居きよゐ玄麟げんりん、その他横尾常次など、池ノ坊の有名な花手にして、門人も亦頗ぶる多かつた、今も

隣県福岡あたりより技巧が優さつてゐるといはれてゐる。

馬賣馬場の宮崎忠造といふは「燕子花の忠造」といふ位、評判した燕子花の生花が名人で、生け込みも敏捷くシカモ疎雑に流れなかつた所に妙があつたといふ、今は悉く故人となり、只水ヶ江町新道の平方觀山(勘)外、若干の師匠ありて斯道の職能に勵んでゐる。

「去風流」は昔から佐賀に家元を有する花法だといふ、伝ふるところに依れば、藩主鍋島勝茂、寛永十五年、島原陣の折りに陣中の無聊を慰めんとて、馬鹽に馬の轡を根締として、花を生けさせたのがその濫觴だと謂はれ、そして藩主勝茂が將に上覧にならうとする時、風俄かに吹きて花を倒し、之を立直す違なくその儘繕ひ、上覧に供したるに、勝茂はその花を見て「之は何流の生花なるぞ」と問ひたるに、側より「去風流にて候」と答へたる由、その眞否は知らざるも「去風流」の花は倒れかけた様に活け込んでゐるは事実で、その花風を伝授しつゝあり。

去風流の家元は最近、蓮池町の松本浅市(露)に伝はつてゐたが、その死後は如何なりしか、目下水ヶ江町新道の高柳彌一郎(寛)などがその牛耳を取て居る、一説には京都にも去風流と称する家元があるともいふ。先年指山延貞といふ人が、熊本辺りから「東山流」を伝へて来たが、佐賀には餘り流行せず、遠州流も先年、県庁、裁判所などの役人達に興味を持てゐたものがあつたが、之も亦市内の人には学ぶ者が餘りなかつたらしい、池ノ坊の外に目下、佐賀の人が学んでゐる生花は

小原流 之は筑後の大川町より田村梅心と云ふが來佐して教授しつゝあると云ふが、同人は茶道にも通じて居る。

未生流 市内神野町の馬場キミヨと云ふを師とする由

清心流 市内龍泰寺小路の田中青桃齋と云ふが其師である、此人も生花の外茶道にも通じてゐる。

三華流 市内上多布施町高岸に住む、石井三華(不二)が、大正の末頃から発明したもので、佐賀瀨記學校や錦華紡績會社等に門人がある。

古流 佐賀郡南川副村大井道の藤戸理明が、出佐して教へているが、此の人は斯道には巧者なる由。

専心池ノ坊 西松浦郡有田町の川口玉庭、出張教授しつつあり。

既白池ノ坊 佐賀郡本庄村の金子洋月(又は陽月)は出張教授している、昭和十年頃より傳はりし所で、本縣女子師範學校、

佐賀高等女學校等に門生ありと云ふ。

而して、此等の池ノ坊その他の諸流は、今や全国各流を網羅せる「日本華道協會」といふ団体の大傘下に加盟し、各流とも其會員として、孰れも花法を發揮してゐると云ふ。

## 第十六編 人物

龍造寺氏の祖藤原季清が、久寿元年肥前の監代として龍造寺村に來り、三代季家が龍造寺村の地頭となり、氏を龍造寺と改め此地に居を構へしより、歴代俊傑を出し中にも龍造寺隆信は、武勇四方に聞へ諸国を徇へて五州二島の太守となつたが、惜しいかな島原に於て戦死を遂げ、其子政治家病弱にして難局に起ちがたく、竜家の族將鍋島直茂その後を繼て鍋島藩の基礎を築き、歴代の藩主英明にして銳意藩治を図り、国政を釐革し、文教を興し、武道を練り雄藩佐賀の名声を挙げ、其間幾多の先哲偉人を出し、殊に明治維新の宏謨を翼賛して、「菊は榮ゆる葵は枯るゝ、西の茗荷めいごに花が咲く」と諺はれ、鍋島男子の面目、剛氣朴訥の氣風、実に躍如たるものがあつた、今此等偉人傑物の小伝を悉くせんは、到底為なし能はざる所にして、其内の多少の人物は本